

「日々の理科」(第2666号) 2021, 10, 31
「アナグリフ多摩川源流への旅(5)」

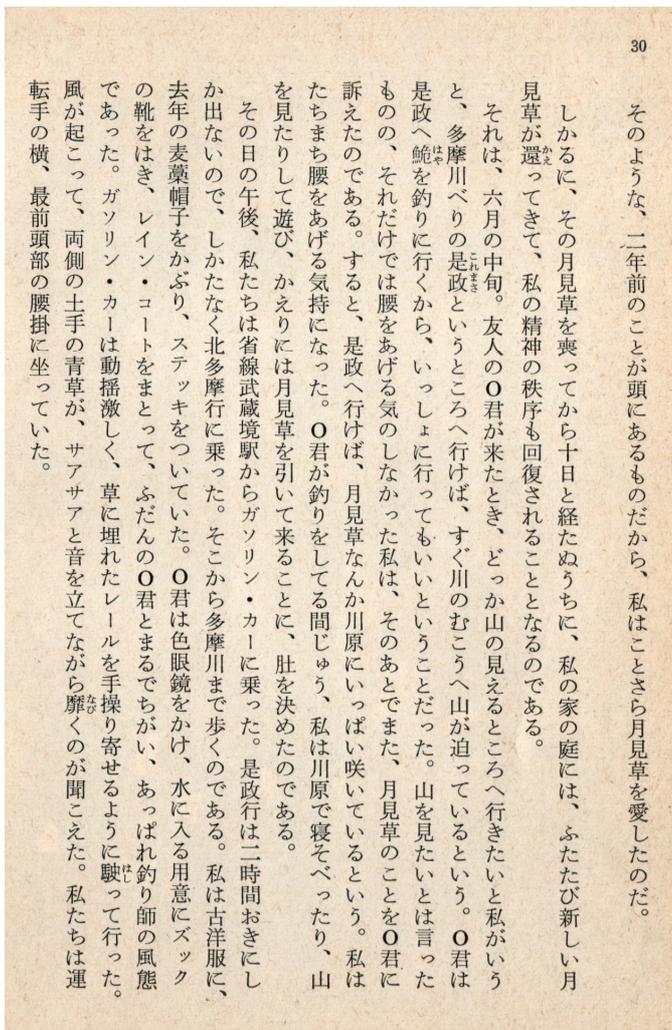
お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

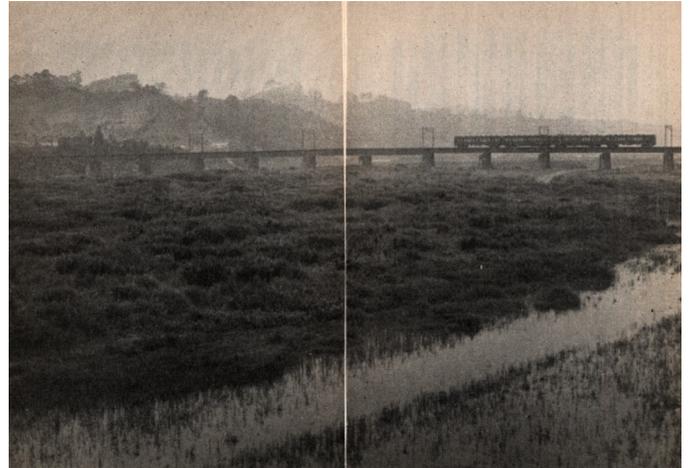
東京競馬場の南側を西に溯ると、「多摩川本流」と「多摩丘陵」が最も接近する。その様子は、上林 暁(かんばやしあかつき)の短編「花の精」にも記されている。上林はあまり知られていない作家だが、武蔵野一帯を舞台にした、いわゆる「私小説」や「病妻もの」と言われる一連の短編作品を残している。井伏や太宰と同時代の作家だ。

「花の精」は、庭にあった月見草を、庭師が刈り取ってしまい、意気消沈している主人公(上林自身)が、友人と是政の川原に月見草を採りに行くという、実にも他愛もないストーリーだ。以下はその一節である。

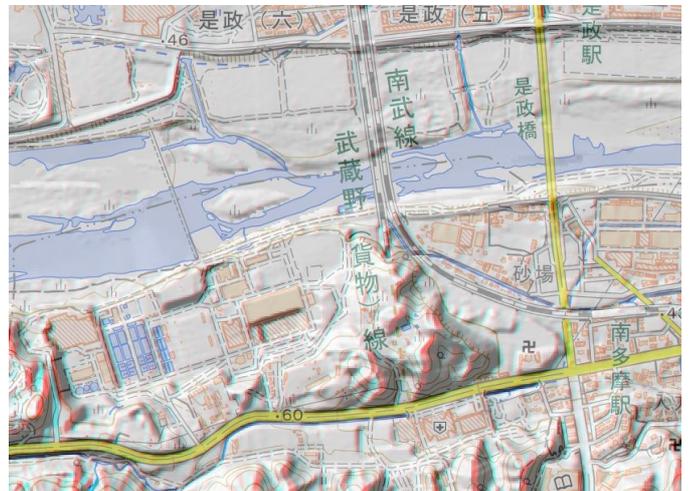


「すぐ川のむこうに山が迫っている・・・」まさにその通りの地形だ。省線(鉄道省の路線)武蔵境駅から乗った「ガソリン・カー」というのは、今で言う気

動車の一種で、現在の「西部多摩川線」の路線を走っていた、粗末な列車のことである。「花の精」は「武蔵野」という短編集の中の一作品で、作中には大竹新助氏の写真がたくさん使われている。大竹氏は主として武蔵野地域を題材にした風景写真家である。



写真はその一枚で、是政(府中市)側から、対岸の多摩丘陵を望んだ風景が、見開き一杯に掲載されている。鉄橋は南武線の多摩川橋梁で、当時は4両編成の電車が走っていたようだ。武蔵野線(貨物線)や、是政橋はまだない。作中には粗末な「仮橋」があり、橋守が通行人から橋賃を徴収する場面も描かれている。



現在の是政橋付近の地形図はこのようになっている。北側の府中市から南下する「府中街道」は是政橋で多摩川を渡る。多摩丘陵に阻まれるように川崎街道にぶつかる。鉄道は、南武線と武蔵野線(貨物線)が多摩川を渡っている。古くからある南武線のほうは、多摩丘陵を避けるようにカーブを切り、多摩川右岸を東に向かい、そのまま終点の川崎まで多摩川に「つき合っ」ている。しかし、武蔵野線のほうは多摩川と別れを告げ、トンネルで多摩丘陵に突入している。武蔵野線は北側の国分寺崖線にもトンネルで突入する。